

青年期のソーシャル・サポート希求行動におよぼす 統制感と文化的自己観の影響

岩 崎 眞 和*・五十嵐 透 子**

(平成26年9月30日受付；平成26年10月30日受理)

要 旨

本研究では、大学生の統制感 (locus of control) と文化的自己観およびソーシャル・サポート希求行動の関連を質問紙調査によって検証した。大学生219名 (男性108名, 女性111名) を分析対象とした結果, 内的統制傾向はソーシャル・サポート希求行動と有意な中程度の正の関連を示し, 外的統制傾向が強い場合に比べて精神的健康も良好であった。また文化的自己観は, 相互協調的自己観がソーシャル・サポート希求行動と有意な弱い正の関連を示した。今後の課題として, サポート源の違いを考慮する必要性について論じた。

KEY WORDS

統制感 locus of control, 文化的自己観 cultural views of self, 精神的健康 mental health
ソーシャル・サポートの希求行動 social support seeking behavior, 大学生 college students

1 問題と目的

人がより適応的かつ精神的健康を維持しながら生活する上で, 互恵的な対人関係の構築は重要な要因の1つであり, 心理学領域では“ソーシャル・サポート”(以下, SSと略記)の授受行為に焦点を当てた研究が蓄積されてきた。SSの授受行為は基本的には二者間の相互関係の上に成り立っており, 時にその対人関係がストレスともなりうるが⁽¹⁾⁽²⁾, 国内の大半のSS研究は, 重要な他者からのSSによるストレス反応低減効果を支持する知見である⁽³⁾⁽⁴⁾⁽⁵⁾。加えて, SSの定義や測定方法が多様ななかでも, “知覚されたSS” “実行 (受け手にとっては受容) されたSS” “ソーシャル・サポート・ネットワーク” が心身の健康におよぼす効果や影響に焦点化されることが多い⁽³⁾。

浦⁽⁵⁾は, SSには受け手自らが課題解決や対処を目的として積極的に求める側面と, 他者から提供されるサポートを受動的に受け取る側面の大きく二側面に区分できることを指摘し, 後者に比べて前者の方が個人の達成感や情緒的安定も得られやすく, またバーンアウトも生じにくいことを明らかにしている。この指摘を踏まえると, 自分一人で解決困難な状態に直面した際にSSを効果的に活用する上で, 周囲に必要な援助を求める“ソーシャル・サポート希求行動”(以下, SS希求行動と略記)の重要性が考えられる。SS希求行動にはパーソナリティや価値観など個人内要因およびそれらを取り巻く社会文化的要因などの影響⁽⁶⁾が指摘されているが, SSが心身の健康におよぼす影響についての研究知見の蓄積に比較して, SS希求行動の関連要因を実証的に検証した研究は少ない。

SS希求行動との関連が推測される個人内要因の1つに, Rotter⁽⁷⁾が提唱した“統制感”(locus of control; 以下, LOCと略記)がある。LOCは, 自分に起こる事象に対して, 主観的にどの程度自分がコントロールしているか, あるいは外的要因によってコントロールされているかという帰属因に関する信念である。たとえば, “知覚されたSS”とLOCとの関連を検証したHerbert, Rod, & Wendy⁽⁸⁾とKaren, Bram, & Robbert⁽⁹⁾は, 外的統制傾向が強い人に比べて内的統制傾向が強い人の方がより多くのSSを知覚したり, SSを得たことによるポジティブな影響を多く受けているという結果を報告している。これは, 欧米では外的統制傾向よりも内的統制傾向の方が精神的健康にとって望ましいとする概ね一貫している見解⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾が, 知覚されたSSの観点からも支持された結果と思われる。しかし, SSの知覚とLOCとの関連に焦点化された結果であり, 内的統制傾向の強さが援助やサポートの直接的な希求行動によって得たSSとも正の関係にあるのかについての検証はなされていない。また日本では小学生を対象に知覚されたSSとLOCを包括した“統制感”(perceived control)との関連に焦点を当てた前原⁽¹²⁾の報告のみで, 青年期以降を対象にLOCと知覚されたSSやSS希求行動の関連を検証した研究の報告はみられない。Rotter⁽⁷⁾や神田⁽¹³⁾は外的統制傾向に比べて内的統制傾向が適応的とする前提に注意を喚起しており, 内的統制傾向が自己批判を促進して抑うつ状態を強める可能性⁽¹⁴⁾も指摘されている。LOCとSS希求行動の関連については, 先の欧米の研究知見から内的統制傾向はSS希求行

動とも正の関連を示すことが推測されるが、内的統制傾向が強すぎる場合には自身のコントロール感を過信することで、SSの必要性を認識したとしても実際にはSSを求めにくく、杉山⁽¹⁴⁾が報告したように精神的健康を損ないやすい可能性が考えられる。

LOCの他にSS希求行動との関連が推測される要因として、社会文化的影響を受けて形成される“文化的自己観”⁽¹⁵⁾がある。文化的自己観とは、文化の中で形成された自己に関する認識を表す概念で、“相互独立的自己観”と“相互協調的自己観”の2つに区分されており、日本文化では他者との結びつきや調和的な相互関係を重視する相互協調的自己観が相対的に優位とされている⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾。中学校教師の文化的自己観とSSの“互惠性”および精神的健康との関連を検証した前澤⁽¹⁸⁾は、相互独立的自己観が優位な人は対人関係において提供するSS量が受け取るSS量を上回る傾向があるのに対し、相互協調的自己観が優位な人は受け取るSS量と、提供するSS量が一致する傾向にあることを報告している。

以上を踏まえ、本研究ではLOCとSS希求行動および社会文化的影響を受けて形成される文化的自己観と精神的健康との関連に焦点を当てる。“SS希求行動”は、久田⁽¹⁾や嶋⁽¹⁹⁾のSSの定義を踏まえ“日常生活において個人を取り巻く家族や友人、恋人などのさまざまな他者に対して有形・無形の支援 (support) を頼んだり、求める行為”と操作的に定義し、福岡・橋本⁽²⁰⁾の研究を参考に“大学生用ソーシャル・サポート希求行動尺度”を作成して測定することとした。本研究で検証する仮説は、以下の2つである。

仮説1) 内的統制傾向が強い人は、LOC得点が中程度あるいは低い人よりもSS希求行動をとりにくい。

仮説2) 相互独立的自己観に比べ相互協調的自己観が優位であるほどSS希求行動をとりやすい。

2 方法

2.1 調査時期と分析対象

2011年12月下旬に、甲信越地方にある単科の国立大学法人1校で講義終了後の集合調査形式(109名)と個別配布個別回収形式(114名)による質問紙調査を実施し、学部1年生から4年生の合計223名から回答を得た。そのうち回答に不備のみられた4名を除く219名(有効回答率98.21%:男性108名,女性111名)を分析対象とした。分析対象の平均年齢は20.89歳($SD=1.31$ 歳, $range: 18-24$ 歳)であった。

2.2 調査材料

質問紙は、回答者の基本的属性を問う項目を記載したフェイスシートと、以下の4尺度を用いた。

(1) **統制感** 鎌原・樋口・清水⁽²¹⁾が作成した成人用一般的LOC尺度を用いた。本尺度は自分の能力やスキルで物事を統制できるという信念が強い“内的統制傾向”と、運や偶然といった外的要因によって自分が統制されているという信念が強い“外的統制傾向”(逆転項目群)の各9項目から構成された計18項目(4件法)の尺度で、信頼性($\alpha = .78$)、妥当性ともに検証されている。内的統制傾向が強く外的統制傾向が弱いほど高得点に、反対に内的統制傾向が弱く外的統制傾向が強いほど低得点になるよう配点された一次元の指標(LOC得点の可能分布範囲:18-72点)として用いられることが多いが、研究目的に応じて徳吉・岩崎⁽²²⁾のように2因子構造の尺度として用いる場合もある。

(2) **ソーシャル・サポート希求行動** 福岡・橋本⁽²⁰⁾が作成した“大学生・成人用知覚されたサポート尺度”を参考に、前述の定義に即した大学生の“SS希求行動”を測定できるよう文末表現を修正した“大学生用ソーシャル・サポート希求行動尺度”を用いた。不安や苦悩といった心理的な不快感の軽減や、自尊心の維持・回復を図ったり課題解決に必要な情報を得るための“情緒的SS”(6項目)と、課題解決に必要な具体的あるいは物質的な資源を得るための“手段的SS”(6項目)の計12項目からなる2因子構造を想定し、「全く求めない」から「よく求める」の5件法で回答を求めた。

(3) **文化的自己観** 高田・大本・清家⁽²³⁾が作成した“相互独立的-相互協調的自己観尺度”(7件法)を使用した。“相互独立的自己観”を表す“独断性”(6項目)と“個の認識・主張”(4項目)、“相互協調的自己観”を表す“評価懸念”(4項目)と“他者への親和・順応”(6項目)の4因子(計20項目)から構成され、信頼性($\alpha = .70-.81$)および妥当性ともに検証されている。

(4) **精神的健康** Goldberg & Hillier⁽²⁴⁾が開発したThe General Health Questionnaireの邦訳版であるGHQ精神健康調査票12項目版(以下、GHQ-12と略記)⁽²⁵⁾を用いた。本尺度は、集団を対象とする健康診断のスクリーニングや、全般的な健康状態の把握に用いられることが多く、日常生活での気分や健康状態およびさまざまなストレス反応など

の包括的評価が可能である。

2. 3 調査手続きと分析ツール

調査協力者に対して、本研究の目的や収集したデータは統計的に処理されるため個人情報保護されること、調査協力は自由意思であり、いつでも回答を中断できることを書面と口頭により説明し、その説明の後、退室や調査協力への辞退の申し出がなかった対象に無記名式の質問紙調査を実施した。集合調査形式の調査においてはその場で質問紙を配布・回収し、個別配布個別回収形式の調査では配布後2週間以内に個人情報の保護に配慮した形で回収した。なお、以降の統計解析にはSPSS ver 21 for WindowsとAmos 18を用いた。

3 結果

3. 1 LOC得点の分布と類型化

LOC得点の平均値は49.14 ($SD=5.98$, $range: 24-68$), 中央値は50.00, *Cronbach*の α 係数は.73と、いずれもLOC尺度開発時の鎌原他⁽²¹⁾と近似した結果であった。LOCの類型は丸山⁽²⁶⁾を参考に、LOC得点の $mean \pm .25SD$ を基準として、中間群を含む3グループに群分けした：(a) LOC低群60名（外的統制群；LOC得点が $mean - .25SD$ 以下）、(b) 中間群111名（LOC得点が $mean \pm .25SD$ の範囲内）、(c) LOC高群48名（内的統制群；LOC得点が $mean + .25SD$ 以上）。

なお、SS希求行動とLOCの関連をより詳細に把握するため、徳吉・岩崎⁽²²⁾にならって後述の相関分析（表2）でのみLOCの一次元指標に加えて、各9項目から構成される“内的統制傾向” ($\alpha = .74$)と“外的統制傾向” ($\alpha = .67$)をそれぞれ算出して用いた。

3. 2 大学生用ソーシャル・サポート希求行動尺度の因子構造

大学生用ソーシャル・サポート希求行動尺度の探索的因子分析（最尤法、*Promax*回転）の結果、固有値の減衰状況と解釈可能性から想定した2因子解を妥当と判断した（累積寄与率：54.30%）。天井効果がみられ、かつ両因子へ

表1 大学生用ソーシャル・サポート希求行動尺度の探索的因子分析結果（最尤法、*Promax*回転）

項目	因子負荷量		h^2	M	SD
	F 1	F 2			
F 1. 情緒的ソーシャル・サポート ($\alpha = .87$)					
1 落ち込んでいる時、元気づけてもらう	.91	-.14	.74	3.78	1.03
11 精神的なショックで動揺している時、なくさめてもらう	.84	-.12	.64	3.68	1.12
8 学校やアルバイト先、家庭などで人間関係について悩んでいる時、相談に乗ってもらおうようお願いする	.78	.10	.68	3.64	1.08
2 やっかいな問題に頭を悩ませている時、気分転換のため一緒に何かをしてもらう	.65	.07	.47	3.76	1.04
5 勉強やアルバイトのことで問題をかかえている時、アドバイスを求める	.60	.11	.42	3.73	1.09
F 2. 手段的ソーシャル・サポート ($\alpha = .73$)					
10 病気で数日間寝ていなくてはならない時、看病や世話をしてもらう	.10	.65	.49	3.13	1.22
4 財布をなくしたりして急に数千円必要になった時、その分のお金を貸してもらう	-.18	.62	.33	3.31	1.18
9 忙しくしている時、ちょっとした用事（家事や簡単な仕事など）を手伝ってもらう	.06	.59	.38	3.28	1.05
7 緊急にかなり多額のお金を必要とするようになった時、その分のお金を出してもらうよう頼む	-.11	.49	.21	3.06	1.30
3 引っ越しなど大がかりな用事がある時、その手伝いを求める	.19	.48	.34	3.84	0.98
12 ちょっとした道具や器具（ノート、鍋、タオルなど）を貸してもらう	.09	.44	.23	3.90	1.00
	因子間相関		.41		

$range$: all items 1-5

の負荷量が.20未満であった「6. 自分にとって重要なことを決めなくてはならない時、アドバイスを求める」を除外し、11項目からなる2因子構造を得た(表1)。福岡・橋本⁽²⁰⁾やVaux⁽²⁷⁾にならない、第1因子を“情緒的SS”(α = .87)、第2因子を“手段的SS”(α = .73)とそれぞれ命名した。

次に、表1の2因子構造および両因子間の相関を仮定したモデルについての確認的因子分析を行ったところ、GFI = .94, AGFI = .89, CFI = .95, RMSEA (90%CI = .04, .08) = .06, AIC = 136.53と概ね許容しうる適合度を得た。

3. 3 相互独立的-相互協調的自己観尺度の因子構造と類型化

相互独立的-相互協調的自己観尺度について、高田他⁽²³⁾にならった探索的因子分析(主因子法, Varimax回転)を実施したところ、高田他と同様の4因子構造が再現された(累積寄与率: 57.26%)。各因子のCronbachのα係数についても.71-.81と十分な値が得られ、“相互独立的自己観”(第1・3因子: α = .85)と“相互協調的自己観”(第2・4因子: α = .77)の上位因子も十分な内的一貫性を示した。文化的自己観の類型は、高田⁽²⁸⁾を参考に、個人内の各自己観の尺度得点(相互独立的自己観得点 = 第1・3因子の合計尺度得点, 相互協調的自己観得点 = 第2・4因子の合計尺度得点)の平均値を基準に4グループに群分けした: (a) 両低群60名(文化的自己観得点の両方が平均値以下), (b) 相互独立的自己観群51名(相互独立的自己観得点が平均値以上で, 相互協調的自己観得点が平均値以下: 以下, 独立群と略記), (c) 相互協調的自己観群49名(相互協調的自己観得点が平均値以上で, 相互独立的自己観得点が平均値以下: 以下, 協調群と略記), (d) 両高群59名(文化的自己観得点の両方が平均値以上)。

3. 4 GHQ-12の因子構造

GHQ-12の探索的因子分析(最尤法, Promax回転)では、Iwata et al.⁽²⁵⁾や新納・森⁽²⁹⁾と同様の2因子構造が再現されたため(累積寄与率: 51.22%), 先行研究にならない第1因子を“不安・抑うつ”(α = .81)、第2因子を“活動障害”(α = .80)とそれぞれ命名した。

3. 5 SS希求行動とLOC, 文化的自己観との相関関係

SS希求行動とLOC, 文化的自己観との関連を検証するため各因子間のPearsonの積率相関係数を算出したところ、“情緒的SS”は内的統制傾向および相互協調的自己観と弱いから中程度の関連を、“手段的SS”は内的統制傾向と相互独立的自己観および相互協調的自己観と弱い正の関連を示した(表2)。SS希求行動と外的統制傾向は、有意な値を示したが関連性は低かった。

表2 ソーシャル・サポート希求行動とLOC, 文化的自己観との相関分析結果

	統制感			相互独立的自己観			相互協調的自己観		
	内的統制	外的統制	合計	独断性	個の認識・主張	合計	評価懸念	他者への親和・順応	合計
SS希求行動									
情緒的SS	.44 **	-.15 *	.40 **	-.06	.09	.01	.27 **	.23 **	.29 **
手段的SS	.25 **	.15 *	.08	.14 *	.24 **	.21 **	.26 **	.24 **	.29 **
合計	.42 **	.01	.29 **	.05	.20 **	.15 *	.32 **	.29 **	.36 **

** $p < .01$, * $p < .05$

3. 6 LOCと文化的自己観がSS希求行動や精神的健康におよぼす影響

LOCと文化的自己観の各類型を独立変数, SS希求行動とGHQ-12を従属変数とする2要因分散分析では有意な交互作用はみられなかったため、LOCと文化的自己観をそれぞれ独立変数とする一元配置分散分析を用い仮説検証を行った。その結果、“SS希求行動合計”“情緒的SS”“活動障害”においてLOCの効果が有意であり、内的統制傾向が強いほど“情緒的SS”を希求しやすく、かつ“活動障害”を呈しにくいことが示された(表3)。また“活動障害”を除いて文化的自己観の効果が有意または有意傾向であり、協調群と両高群はSS希求をしやすいが、独立群と両低群に比べて“不安・抑うつ”を抱きやすい傾向が示された(表4)。したがって、仮説1は支持されなかったが、仮説2は支持された。

表3 LOC類型を独立変数, ソーシャル・サポート希求行動およびGHQ-12を従属変数とした分散分析結果

LOCの3類型	低群		中間群		高群		F値	多重比較 (Tukey法)
	M	SD	M	SD	M	SD		
<u>SS希求行動</u>								
情緒的SS	3.36	1.05	3.74	0.73	4.06	0.75	9.44 ***	低群<中間群<高群
手段的SS	3.36	0.78	3.44	0.71	3.44	0.75	0.29	
合計	3.36	0.77	3.58	0.59	3.72	0.58	4.44 *	低群<中間群・高群
<u>GHQ-12</u>								
不安・抑うつ	0.37	0.36	0.37	0.36	0.32	0.34	0.37	
活動障害	0.25	0.29	0.18	0.26	0.13	0.21	2.99 *	高群<低群
合計	0.30	0.29	0.26	0.27	0.21	0.23	1.58	

*** $p<.001$, ** $p<.05$

表4 文化的自己観の類型を独立変数, ソーシャル・サポート希求行動およびGHQ-12を従属変数とした分散分析結果

文化的自己観の4類型	両低群		独立群		協調群		両高群		F値	多重比較 (Tukey法)
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD		
<u>SS希求行動</u>										
情緒的SS	3.38	0.97	3.69	0.86	3.98	0.65	3.81	0.82	5.02 **	両低群<協調群・両高群
手段的SS	3.19	0.87	3.33	0.70	3.42	0.57	3.72	0.63	5.89 **	両低群・独立群・協調群<両高群
合計	3.28	0.74	3.50	0.64	3.68	0.50	3.76	0.58	6.84 ***	両低群・独立群<協調群・両高群
<u>GHQ-12</u>										
不安・抑うつ	0.30	0.34	0.27	0.31	0.42	0.39	0.44	0.36	3.34 *	両低群・独立群<協調群・両高群
活動障害	0.20	0.27	0.13	0.23	0.21	0.28	0.21	0.25	1.20	
合計	0.24	0.27	0.19	0.23	0.30	0.30	0.31	0.26	2.31 †	独立群<両高群・協調群

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$, † $p<.10$

4 考察

本研究では、LOCとSS希求行動および文化的自己観と精神的健康との関連を検証した。その結果、LOCの内的統制傾向が強いほどSS希求行動がみられやすく精神的健康状態での活動障害を呈しにくいこと、相互協調的自己観が優位なほどSS希求行動がみられやすく不安や抑うつ感を抱きやすい傾向の2点が示され、仮説2のみが支持された。仮説1は支持されなかったが、適応的で精神疾患の発症につながりにくい内的統制傾向⁽¹⁰⁾は、SSの希求行動とも正の関連がみられ精神的健康の維持に寄与している可能性が示唆された。内的統制傾向が強いことは、周囲の出来事や結果、相手の反応などと自身の行動を関連づけて考えやすいことを意味しており、対人関係で悩んだり、自分にとって思わしくない結果が生じた際に自分ができる行動の変化や対応を模索する過程で誰かに相談したり、話しをきいてもらうという行動を取りやすいと考えられる。一方、外的統制傾向が強い場合には、悩んだりした際も自分の行動を変えたり、異なる対処行動をとったとしても結果が変わるという期待が低いいため、SSを求めにくいことが推測される。

SS希求行動と文化的自己観の関連では、相互協調的自己観が優位であるほど情緒的SSを希求しやすく、相互独立的自己観と相互協調的自己観の双方が高い場合には手段的SSを求めやすいという2点が示され、前者は仮説2を支持する結果であった。中学校教師を対象にSSの互惠性と文化的自己観の関連を検証した前澤⁽¹⁸⁾は、相互協調的自己観が優位であるほどSSの互惠性が高い結果について、他者との協調性や“持ちつ持たれつ”の関係が重視される日本文化では、SS希求行動がSSの授受を促進することで互惠の関係が構築されやすい可能性を指摘している。一方、後者の両自己観の高さと手段的SSの求めやすい点については、2つの自己観の発達との関連が考えられる。高田⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾は、児童期から老年期にかけての日本人の文化的自己観の発達過程において、青年期までは相互協調的自己観が優位であるが成人期以降になると徐々に相互独立的自己観が発達し、相互協調的自己観の“評価懸念”が低下することを報告している。これらを踏まえ高田⁽¹⁷⁾は、日本人の自己の成熟過程において相互協調的自己観が生涯を通じてその基盤となりながらも、成人期以降に相互独立的自己観も発達し双方が統合化されていくことを論じている。本研

究対象である20歳前後の大学生は、自己の成熟においては相互独立的自己観の発達途上にあると考えられるが、以上を踏まえると手段的SSを希求できるようになっていくことは相互独立的自己観の発達と密接に関連していると推測される。

なお、文化的自己観の類型による分散分析で、“協調群”と“両高群”が他の2群（“両低群”と“独立群”）に比べて不安や抑うつ傾向が有意に高く、SS希求行動をとりやすい結果は、相互協調的自己観の測定内容に“評価懸念”が含まれていることが考えられる。高田⁽¹⁷⁾も高田・大本・清家⁽²³⁾が作成した“相互独立的-相互協調的自己観尺度”の課題の1つとして他者との結びつきや相互協調を重視する傾向に“評価懸念”が含まれる点を挙げており、本研究結果を併せて考えると相互協調的自己観が優位な人はSS希求行動もとりやすいが、同時に相手に負担となることへの心配や対人関係における不安も抱きやすい可能性も考えられる。

最後に、本研究の課題として内的統制傾向が強い対象の抽出が十分でなかった点、SS希求行動の測定においてサポート希求対象を識別しなかった点、精神的健康のネガティブな側面のみを用いた点の3つが挙げられる。1点目の課題については、LOC尺度⁽²¹⁾の他に内的統制傾向が強い状態を把握するための異なる指標を加えたり、質的研究アプローチを用いた検討が必要と思われる。2点目の課題については、LOCや文化的自己観とSS希求行動の関連をより詳細に検証するために、量的測定において調査対象の主要なソーシャル・サポート・ネットワークを考慮したSS希求対象を設定する必要もあると思われる。3点目の課題については、今回用いたGHQ-12では精神的健康のネガティブな側面しか把握できないため、主観的well-beingや生活満足感などポジティブな側面も含め、精神的健康を包括的に測定可能な指標を用いた更なる検討が求められる。以上の課題を踏まえながら、SS希求行動の関連要因についての研究知見を蓄積していくことで、個人がより支援を求めやすくなるための臨床心理学的援助に向けた有益な示唆が得られると考えられる。

付記

本研究は、上越教育大学学校教育学部の岡嶋美咲さんの卒業研究のデータを再解析したものです。当時の調査にご協力いただいた学生の皆さまと、研究データを提供して下さった岡嶋美咲さんに深く感謝申し上げます。

引用文献

- (1) 久田 満 (1987). ソーシャル・サポート研究の動向と今後の課題 看護研究, 20, 170-179.
- (2) 橋本 剛 (2005). ストレスと対人関係 ナカニシヤ出版
- (3) 福岡欣治 (2006). ソーシャル・サポート研究の基礎と応用——よりよい対人関係を求めて—— 谷口弘一・福岡欣治 (編著) 対人関係と適応の心理学——ストレス対処の理論と実践—— 北大路書房
- (4) 水野治久・谷口弘一・福岡欣治・古宮 昇 (編) (2007). カウンセリングとソーシャルサポート——つながり支えあう心理学—— ナカニシヤ出版
- (5) 浦 光博 (1992). セレクション社会心理学 8 支えあう人と人——ソーシャル・サポートの社会心理学—— サイエンス社
- (6) Dalton, J., Elias, M. J., & Wandersman, A. (2001). *Community psychology: Linking individuals and communities*. Stamford, CT: Wadsworth. 笹尾敏明 (訳) (2007). コミュニティ心理学——個人とコミュニティを結ぶ実践人間科学—— トムソンラーニング
- (7) Rotter, J. B. (1966). Generalized expectancies for internal vs. external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, 80, 1-28.
- (8) Herbert, M. L., Rod, A. M., & Wendy, E. S. (1984). Locus of control and social support: Interactive moderators of stress. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 378-389.
- (9) Karen, I. V., Bram, P. B., & Robbert, S. (1997). Social support, locus of control, and psychological well-being. *Journal of Applied Social Psychology*, 27, 1842-1859.
- (10) 樋口一辰・清水直治・鎌原雅彦 (1979). Locus of Controlに関する文献的研究 東京工業大学人文論叢, 5, 95-132.
- (11) 水口禮治 (1985). 人格構造の認知心理学的研究——Locus of Control (統制の所在)に関する疎-密性仮説の提唱と検証—— 風間書房
- (12) 前原武子 (1998). 無力感とソーシャルサポートとの関連性に介在する統制感の効果 琉球大学教育学部教育実践研究指導センター紀要, 6, 55-60.
- (13) 神田信彦 (2009). Locus of control再考——その問題及びセルフコントロールとの関係—— 立教大学心理学研究, 51, 19-30.

- (14) 杉山 崇 (2000). 内的統制感は常に抑うつを軽減するか?—ストレス状況における抑うつの自己批判モデルと無力感モデル— 心理臨床学研究, 17, 513-524.
- (15) Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- (16) 高田利武 (2004). 「日本人らしさ」の発達社会心理学——自己・社会的比較・文化—— ナカニシヤ出版
- (17) 高田利武 (2012). 日本文化での人格形成——相互独立性・相互協調性の発達の検討—— ナカニシヤ出版
- (18) 前澤可奈子 (2008). 中学校教師の同僚間におけるソーシャル・サポートの互恵性と文化的自己観および精神的健康との関連 上越教育大学大学院学校教育研究科修士論文 (未公開)
- (19) 嶋 信宏 (1992). 大学生におけるソーシャルサポートの日常的ストレスに対する効果 社会心理学研究, 7, 45-53.
- (20) 福岡欣治・橋本 幸 (1997). 大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャル・サポートとそのストレス緩和効果 心理学研究, 68, 403-409.
- (21) 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治 (1982). Locus of Control尺度の作成と, 信頼性, 妥当性の検討 教育心理学研究, 30, 302-307.
- (22) 徳吉陽河・岩崎祥一 (2014). 自己成長主導性尺度II (PGIS-II) 日本語版の開発と心理的測定 心理学研究, 85, 178-187.
- (23) 高田利武・大本美千恵・清家美紀 (1996). 相互独立的-相互協調的自己観尺度 (改訂版) の作成 奈良大学紀要, 24, 157-173.
- (24) Goldberg, D. P., & Hillier, V. F. (1979). A scaled version of the general health questionnaire. *Psychological Medicine*, 9, 139-145.
- (25) Iwata N., Okuyama Y., Kawakami Y., & Saito K. (1988). The twelve-item general health questionnaire among Japanese workers. *Environmental Science (Journal of the Graduate School Environmental Science)*, 11, 1-10.
- (26) 丸山千尋 (2008). Locus of Controlが対人ストレス・コーピングの選択に与える影響 上越教育大学学校教育学部卒業論文 (未公開)
- (27) Vaux, A. (1988). *Social support: Theory, research, and intervention*. New York: Praeger.
- (28) 高田利武 (2007). 日本人青年と中高年層における相互独立的・相互協調的自己スキーマの形成 心理学研究, 78, 495-503.
- (29) 新納美美・森 俊夫 (2001). 企業労働者への調査に基づいた日本版GHQ精神健康調査票12項目版 (GHQ-12) の信頼性と妥当性の検討 精神医学, 43, 431-436.

Effects of locus of control and cultural views of self on social support seeking behavior in adolescence.

Masakazu IWASAKI* · Toko IGARASHI**

ABSTRACT

This study examined the relationships of the locus of control (LOC) with the cultural views of self and social support seeking behavior. Data were collected from 219 college students (108 men and 111 women) with three questionnaires. The results indicated that internal locus of control and both interdependent self-construal and independent self-construal were positively correlated to social support seeking behavior. In addition, participants with higher internal locus of control tended not to have “social dysfunction” compared to participants with lower internal locus of control. Suggestions for further studies were included, especially the importance of clarifying the relationships between support sources and other variables.

* The Joint Graduate School in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education (Ph. D. Program)

** Clinical Psychology, Health Care and Special Support Education